

雜吟

松村武雄

小生在校の頃には、二三人俳句に長けし者あり、小生もその尻馬に乗つて少し試み候が、鈍根の資、とてもものにならぬと、すぐに放下し去り候も、老來蟹行の文字に倦む暇々に、またもや性懲りもなくやり始め候。下手の横好きの典型的なるもの、盡くひどい綿入りなるは勿論に候。

先づ、母校創立五拾周年を衷心より祝して、

もの古りし學舎いや榮さかに菊香る

と申上げ、次々に、

行く春や瀬の音晴れて鯉の飛ぶ

客を送る燭に映るや雨若葉
うち上げし魚の腹白うして明け易き
菊香る磨師が居間の白木鞘
白雨過ぎて町に灯いりぬ沖繪
厠出し眼に南天の實の赤き
葦の間に淡き煙や時雨船
秋の晷に白壁並ぶ港町
木枯や棒鱧の身の日に細る
馬洗ふ温泉煙りて冬の月